

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 奥 彩子

奥彩子「境界の作家ダニロ・キシユ——『ユーゴスラヴィア』から『中央ヨーロッパ』へ」はユーゴスラヴィアの作家ダニロ・キシユ（1935－89年、パリで客死）の全作品を読み込むことによって、作家の人生と作品の全体像を描きだしたわが国のみならず、英語圏でも初めての本格的な論文である。

キシユはユーゴスラヴィアとハンガリーとの国境の町スポティツァで、ハンガリー系ユダヤ人の父とモンテネグロ人（セルビア人）の母とのあいだに生まれた。そのため、ハンガリーとユーゴスラヴィア、ハンガリー人とモンテネグロ人、ユダヤ教とセルビア正教、ハンガリー語とセルビア語といった民族、宗教、言語、文化の「境界」に生きることを余儀なくされた。キシユは幼年期に反ユダヤの嵐が吹きすさぶ環境のなかで死の危険におびえながら過ごただけでなく、父親がアウシュヴィッツで消息を絶ったことから、心に深い傷を負った。こうした環境がキシユの差異についての感覚を研ぎ澄ませることになり、自己のアイデンティティの追求に駆り立てた。本論文では、心に深い傷を生じさせた原因、キシユ自身「不安を生みだす差異」と表現しているものが全作品を貫くテーマとして捉えられており、自らの境界性を突き詰めることで、普遍的なものを獲得しようとしたキシユの試みが、初期の小説、中期の小説群、後期の短編小説まで、年代を追って一つずつ作品を取り上げる形で分析され論じられている。

本論文は序論と結論を除く6章から構成されており、A4用紙で脚注を含めて171ページ、参考文献表が12ページからなる力作である。キシユの刊行した小説7冊が直接の分析対象であるが、エッセイ集3冊、その他、戯曲、テレビドラマの脚本、インタビューの記事、さらには生涯を通じて詩人であろうとしてきた作家の未発表の詩40篇にも目配りがされている。これらの作品はすべてセルビア語によるものであり、日本語訳は奥彩子の翻訳『砂時計』を含めて3冊の小説のみである。

序論では、ユーゴスラヴィア文学史が概観され、そのなかでのキシユの位置づけが行なわれると同時に、キシユに関する先行研究についてふれている。わが国ではキシユを取り扱う初めての博士論文であることから、キシユの伝記的事実も描かれている。本論文の中心的な概念である「不安を生みだす差異」についての問題設定をしたうえで、「ユーゴスラヴィア」や「中央ヨーロッパ」という地域概念が、境界の作家キシユにとってどのような意味を持っていたのかという問題提起がなされる。

第一章「詩と小説のはざままで」では、諷刺詩という副題がつけられている初期の小説『屋根裏部屋』が取り上げられる。この小説は、キシユの創作活動の原点であった詩への志向

が小説の形式で実現された作品である。ここでは詩と小説という方向性がこの作品のなかで、どのように融合しているのかが検討され、叙情から叙事へという視点の転換がすでになされたと指摘している。

第二章「ユダヤという主題」では、『詩篇 44』というアウシュヴィッツの強制収容所を舞台とする初期の小説が分析されている。キシユが再版と翻訳を認めていない唯一の作品であることから、研究対象となることがほとんどない。この章では、なぜ、この小説が注目されることを避けたのか。アンビヴァレントなユダヤ人という意識のあり方（「ユダヤ性」）を、「不安を生みだす差異」との関連で検討し、キシユが神と宗教についての考えをどのように表現しているかを分析する。

第三章「世界の書物」では、自伝的三部作と称される『庭、灰』『若き日の悲しみ』『砂時計』が取り上げられる。これら三作品を「文学をめぐる教養小説」という視点から検討し、とくに『砂時計』の重要性が強調される。『砂時計』は失われた世界の完全な再構築を目的に書かれ、ユダヤ人である父親が主人公とされる。この章では、「ユダヤ性」に直接係わる父親を主人公にしながら、表現形式にさまざまな工夫を凝らして、それと距離をとろうとするキシユの手法に注目して分析がなされ、普遍性を求めるキシユの試みが一定の成功を収めたと評価する。

第四章「1970年代の文学論争」では、7つの短編からなる『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』という作品が引き起こした文学・政治論争について、その経緯が概観される。さらに、この短編集では、主人公が「一人称」から「三人称」をへて、「三人称複数」になった点を指摘し、個の体験を普遍的なものとして表現するというキシユの課題が達成されたと結論づけている。

第五章「語り手としての女たち」では、短編集『死者の百科事典』から、女性を語り手とする二つの短編を取り上げ、『ボリス・ダヴィドヴィチの墓』ではまだ達成できていなかった叙情性を復権させたことが検討される。女性による語りは感情豊かに男の人生を歌い上げ、それに作者である男の声が重なり、幾重にも重なり合う声がハーモニーを生み出す。キシユが作家として、長年求めてきた「知的な叙情」が表現されていると指摘している。

第六章「故国のない男」では、『死者の百科事典』に収録する目的で書き始められたが、未完成に終わった短編『アパトリッド』を題材として、「中央ヨーロッパ」という概念が検討される。『アパトリッド』は「中央ヨーロッパ人」の劇作家の運命を描く作品であり、これは境界の作家キシユが身をもって生きることになる運命であった。ここでは、1986年のエッセイ「中央ヨーロッパ変奏曲」を主な素材として、キシユにとっての「中央ヨーロッパ」という概念の検討がおこなわれる。

結論「境界の作家ダニロ・キシユ」では、境界の作家キシユのあり方が本論の分析を通してまとめられている。キシユが自己のアイデンティティーの追求の果てに、普遍的なものが存在する場として見出したのが「中央ヨーロッパ」であったと結ばれている。

本論文の研究上の貢献としては次の3点が指摘できる。第一に、キシユという作家のす

すべての作品を読み込むことによって、その全体像を描き出した点である。「キシユ学」という用語がセルビアだけでなく、欧米でも用いられ、その研究が始められている。本論文はわが国のキシユ研究の嚆矢をなす論文であり、今後、キシユ研究を行なううえでの基本的な研究となりうる。第二に、セルビア語で書かれた難解なキシユの全作品を原語で読み込む作業は容易なことではなく、ユーゴスラヴィア文学研究、東欧文学研究の質を大いに引き上げた。第三に、地域文化研究のなかに文学をどのように位置づけるかは困難な問題であり、さまざまな模索がなされている。本研究は境界の作家キシユを取り上げることで、地域文化研究における文学研究の一つのモデルを提示したといえる。

全体として、本論文は学術論文としての客観性と、文学としての感動を伝える叙情性を兼ね備えた好論文と評価できる。

上記のように、本論文はきわめて高く評価することができるが、問題点がないわけではない。審査会では、①論文全体を貫くテーマである「不安を生み出す差異」によって、全体が必ずしも統一的に描き出されているとはいえない、②個別のテーマが提示されているだけで、十分に論じられているとはいえない、③境界という用語についての説明が不十分であり、イメージしにくい、境界という表現が妥当なのか、④「中央ヨーロッパ」という概念は同じ東欧の作家であるクンデラやゴンブロヴィチのそれとどこが違うのか、⑤キシユのテキストの読み込みに不正確な部分が見られる、などの本論文の問題点や今後の課題を含めた指摘がなされた。

しかし、審査委員会は指摘された問題点の本論文の学術的な価値を損なうものではなく、本論文が博士論文としての水準を十分に超えていると判断した。したがって、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。